

ファーストレベル

再会への道



発行元 セカンドレベル・ミニストリー
2022年11月 第四版発行
聖書 新改訳©2017 日本聖書刊行会

Second Level Ministry
dainidankai@secondlevel.org
www.secondlevel.org

© 2022 Second Level Ministry

All rights reserved.
ISBN 979-8-76335-340-2

目次

はじめに.....	3
1. 神とは.....	4
2. 人間とは.....	7
3. 罪とは.....	10
4. イエス・キリストの十字架とは.....	13
5. 救いとは.....	16
後部付録 1. 神とは.....	21
後部付録 2. 人間とは.....	23
後部付録 3. 罪とは.....	24
後部付録 4. イエスの十字架とは.....	25
後部付録 5. 救いとは.....	28
あとがき.....	31

はじめに

人生のスタートとは、産声を上げて生まれた時に始まったものだと普通考えるでしょう。しかし、聖書には創造主である神様という方が存在し、人が生まれる前から一人一人を造るご計画を持っていたと書かれているのをご存じでしょうか。あなたの想像をはるかに超えて、神様はこの世の一人一人をととても大切にしておられます。ですから、あなたも神様に価値ある者として知られ、この世に存在しているのです。

神様という存在を知る時、あなたは神様とはじめて出会えたと思うかもしれませんが。けれども実のところ、それは神様からしてみれば「再会」なのです。と言うのは、あなたが神様を知らずに生きている間も、生まれる前からあなたをご存じである神様は、あなたが神様の存在に気付くことをずっと待っておられたからです。

再会とはしばらく離れ離れになっていた以前からの知り合い同士が再び出会い、新たな関係を育むことにもつながります。神様との再会は、同じようにあなたと神様の関係が変革する大きな出来事となりえるのです。これは、新しい人生のスタートとも言えるでしょう。

神様と再会し神様との新しい関係をもった時から始まる人生とは、今まで知らなかった神様のあなたに対するご計画と目的を確信して歩むことです。

「ファーストレベル」は、あなたが神様と再会するための道のりを導きます。神様が持っておられるご計画と目的について、一緒に学んでいきましょう。

神



アニメーションはこちら

1. 神とは

神を知ることができるのか

「神」と聞くと、目には見えないけれど遠くから私たちを見ていて、必要な時にだけ呼び求める対象としてとらえがちです。神とは何なのでしょう。そして、この不明確な存在である神を私たちは知ることができるのでしょうか。

多くの日本人は「宗教は仏教です」と言いますが、それでも神社での初詣や七五三のお祝いなど、神道の慣習を大切にします。さらにはクリスマス祝ったり結婚式はキリスト教式で挙げたりします。そして葬儀が仏式で執り行われます。このように私たち日本人が一般生活において多数の宗教に関わるとき、それが信仰に基づいているとは限らず、伝統、文化、トレンドに影響されていることが分かります。宗教イベントに参加しても、その宗教が教えている神を知った上での行動ではないのです。

また、日本には「八百万の神」という神道の教えの影響で、自然神（日神、風神、雷神、山神、水神）、人間神（女神、先祖神、英雄神）や職業の神（農業の神、漁業の神、交通の神）または、福をもたらす七福神など、無数の神々を崇拝する習慣も多く見られます。だからと言って日本文化や習慣が、これらの神々が実際に存在するのか、また神々の実態や性質は何なのかということを教えているわけではありません。

知ることができる聖書の神とは

聖書は神の自己紹介の書物と言われています。聖書にこそ、真の神とはどのような存在であるかがはっきりと書かれています。そこでは神という存在は無数ではなく、この世界に一人しかいないと断言しています。聖書の神とは唯一の存在であり、英知と人格を持っているお方であり、この神は人間が知ることのできる存在であると言っているのです。

聖書の神を知る方法として3つの分野が挙げられることがあります。それは自然界と摂理（物事のすじみち）と啓示（神によって示されたこと）です。自然界においては、世界の美しさと宇宙の壮大さ、そして自然の秩序を見ることで神の存在を知れるということです。また摂理の面から考える時、無からは何も生まれないとすれば、宇宙や生命の起源には永遠に存在する知恵者（神）がいないと、世界の始まりは論理的に不可能であることを知ることができます。最後の方法である啓示とは、神が自らの存在、性質、人格を最も正確に人類が学ぶことができるように聖書に記録して下さったことです。

この聖書の神を知る旅は、まずは、この唯一の神が存在するという可能性に心を開くことによって始まります。この最初のステップがなければ、真の神に出会い、神を知っていくことは難しいでしょう。

聖書の神はどのようなお方か

『はじめに、神が天と地を創造された。』（創世記1:1）これは聖書の一番はじめに書かれていることです。聖書とは、神様の導きによって書かれた書物です。聖書を見ると「創造主」である神様がおられるとわかります。

聖書を通して、神様はご自分がどのようなお方か示されました。聖書の神は物体でも力（フォース）でもなく、英知と人格をもつお方であるので、敬意を示すために、ここでは神様と呼ぶことにします。この神様は私たちが神様を知れるように聖書を通してご自分のことを次のように説明しています。

神様には「永遠」という性質があります。なぜなら、神様は全世界ができる前から、いつも存在しておられるからです。

神様は「聖なる、聖なる、聖」なるお方です。それは、単に神が良いことをされているというだけでなく、あらゆる点で「純粋」で「完璧」という意味です。神様は「善」の基準を造られた方であり、神様には悪や間違いはありません。完全な神聖さのために、神様には不純や邪悪さがありません。神様は「全知全能」のお方です。私たちの行動の背後にある思いや動機も「すべてご存知」です。神様は「あらゆるところに存在」でき、一度に一つの場所だけに限られることはありません。

神様はこの宇宙とそこにあるすべてのものを創造された方です。神様はご自身との関係を持つために人を創造し、溢れるばかりの愛をもって私たち一人ひとりを造られました。神様は私たちの天の父です。神様は信頼に値するカウンセラーであり、私たちの人生のガイドです。また神様は知恵の源です。神様は私たちの必要を完全に満たすことができます。神様は愛です。神様の「ゆるし」には限界がありません。神様は私たちが他者への助けとなれるように、まず私たちを豊かに祝福してくださいます。

考えてみましょう

あなたの「神」に対してのイメージは変わりましたか？

私たちは聖書を通して神様がどのようなお方なのか知ることができます。しかし、「神について学ぶこと」と「神を知ること」は違います。神様に関する情報を学んでも、神様と出会い、新たな関係を結ぶためには、神様があなた個人をどのように思われているかを知ることが大切です。神様はただ存在するだけでなく、今も生きて働いておられ、あなたの人生のはじめから終わりまで、あなたの為だけの計画と目的を持っていると言われるからです。

この聖書の神様が本当に存在しているのならば、あなたは神様と出会いたいと思いませんか？

次の「2. 人間とは」では、人はどのような存在なのかについて学びます。

この章の内容についてさらに学ばれたい方は、「**後部付録 1. 神とは**」をご覧ください。



アニメーションはこちら

2. 人間とは

目的をもって創られた

「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。
神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」
(創世記 1 章 27 節)

神様はすべてのものを創造されたお方ですから、初めの人間もお造りになりました。神様は孤独や好奇心から人間を創造したのではありません。愛なる神様は良いお方なので、素晴らしいものをわかち合うために人間を造られました。それは、神様と人間が個人的な関係を持ち、人間が神様から与えられた全てを楽しみ、神様と共に生きることができるためです。

人間は他の動物とは違い、神様と個々の信頼関係を持つ対象として創造されました。また神様はご自分のかたちに人間をつくられたので人間にも理性、意志、感情が備えられ、神様を愛し神様のご計画と目的を理解できるようにデザインされています。人類全体としても、個々としても、私たちは偶然に存在する者ではなく、目的を持って造られているのです。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。
それは非常に良かった。」
(創世記 1 章 31 節)

聖書は私たちが住んでいる世界は人間のために造られたと言います。神様がこの世界を「非常に良い」とされたとき、最後の仕上げとして私たち人間は造られたのです。聖書には、最初の人間アダムとエバについての詳細が書かれています。アダムとはユダヤの言葉で「人」を意味します。そして、エバとは「全ての母」を意味します。それは、私たちを含め、全人類はアダムとエバに続く子孫だからです。

神様はエデンという場所を地上に造られました。それは人間が神様と共に暮らす最初の場所として備えられた楽園で、アダムとエバは神様との素晴らしい愛に基づいた信頼関係の元に生活していました。しかし、それは長くは続きませんでした。

壊れた関係

すべてのものが神様によって造られたとき、それらは非常に良い状態で、自然と人間の関係、そして人間同士、さらに人間と神様の関係も完璧でした。ところが今はどうでしょうか。世界は多くの問題と災難で満ち、良くないものであふれています。それは人間関係に

ついても同じです。つまり、すべては最初の「非常に良い」状態から離れているのです。それは過去に起こったある出来事が、現在の不完全な世の中をもたらしたからです。

「神である主は、人に命じて仰せられた。
『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べて良い。
しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。
それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。』」
(創世記2章16-17節)

エデンの園には人間が食べることのできる実がある木々のうちに、一つの禁じられている木がありました。神様はその木から食べると死ぬと仰せられました。

「そこで、蛇は女に言った。『あなたがたは決して死にません。
あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、
あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。』
そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、
目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。
それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」
(創世記3章4-6節)

神様を拒絶した悪魔という存在は、蛇の姿になって現れ「禁じられた実を食べても死なない」とアダムとエバを説得しました。それを食べると彼らは神様のようになり、善悪の基準を自分で決めることができると言ったのです。「賢くなれる」、つまり神様と同じレベルなるという悪魔の誘惑に負け、アダムとエバは禁じられた木の実を食べてしまいました。被造物である人間が、創造主である神様の権威に反抗したのです。この時から人間は、自分を満足させることしか考えることができない、最も自己中心な、最も欲望深い存在になってしまいました。

アダムとエバは自分たちの過ちを隠そうとしましたが、神様はすべてをご覧になることができ、すべてをご存知でした。愛なる神様は命令にそむいた彼らの近くに寄り添って語りかけられましたが、アダムとエバは隠れた場所から神様の前に戻ることもせず、自分たちの間違いを謝ることもなく、ひたすら責任転換の言い訳を並べました。神様と人間との間にあった、愛と信頼に満ちて完璧だった関係は「死んでしまった」のです。

神様とは完璧で聖く、義なる権威を持つお方です。そのため不誠実、不従順、不義、また不純さというようなものからかけ離れています。自分たちの創造主である神様に反抗したアダムとエバは、神様と共に住んでいたエデンの園から追放され、人間と神様との間には、埋めることができない亀裂が入ってしまいました。

このように、人類最初の間は、創造主である神様に対立する罪を犯したので、世々に渡る子供たちは皆、「人の墮落」と呼ばれる、聖い神様から遠く離れた状態の中に生まれるようになってしまいました。このことは、神様がもともと意図されていた人間と神様との

愛に基づく関係は壊れている状態であることを意味します。

壊れた関係の回復

けれども、罪は憎んでも人間を愛しておられる神様は、私たちと離れている状態をそのままにはされませんでした。神様は時を超えて変わらない約束を人類に与えて下さいました。それは、ふさわしい時に「救い主」というお方により、罪の問題を解決し、私たちと神様の関係を回復して下さるという約束です。

愛なる神様は私たちを見捨てることはなさいません。目的を持って私たち一人一人を創造なさっている神様は、神様を裏切って離れてしまったアダムとエバの子孫それぞれが、人類の歴史の中で存在するべき時と場所において神様と再会し、神様との関係を修復する道しるべを与えて下さっているのです。

それでは、神様はこの墮落した世界に生きている私たちをどのようにして救おうとして下さったのでしょうか。それを知るためには、まず今の世界がいかに関係において悪い状態にあるのかを知る必要があります。次の「3. 罪とは」で見てください。

この章の内容についてさらに学ばれたい方は、「**後部付録 2. 人間とは**」をご覧ください。

罪



アニメーションはこちら

3. 罪とは

「罪人」とは

「罪」と聞くと、法律に反する犯罪を思い起こします。けれども、罪という言葉を理解するには犯罪の種類や度合いではなく、法が破られたという事自体に注目する必要があります。世の中には様々な決まり事があり、全ての国は、独自の法律を持っています。国々で共通する法律も見られるでしょう。例えば、「盗んではいけない。」というのはどこにでも共通する法律です。あるいは、シンガポールではガムの販売は違法だという独特な決まり事があります。法律とは、それぞれの社会に要求されている基準ですが、人間社会の法律の他にも自然界の秩序（例：種が成長するには、水や栄養が必要など）や化学反応の法則もあります。神様の「法律」とは人間の作り上げた法律よりも自然界の法則と似ています。

つまり神様の完全な義と神聖さは、それ自体が神様の法則なのです。神様はご自身の聖なるご性質に反することはできません。神様は何でもできるお方ですが、一つだけできないことがあるならば、それは罪をおかすことです。それが例え小さな嘘であったとしても、嘘をついた時点で神様は「聖なる」存在ではなくなるからです。

法律がその国民の安全を守るためにあるように、完全な義である神様は、人間が神様の目的にそった最高の人生を生きるために、神様の法則を与えました。しかしアダムとエバの墮落により、全ての人間が罪の性質をもって生まれてくるようになったのです。この罪の性質は、人間が罪を犯す原因となり、心の中にある不純な思いから犯罪に至るまで、ありとあらゆる罪をすべての人間は犯してしまう様になりました。私たちは誰一人として神様の聖い基準に完全にしがうことはできません。そして神様の法則を犯す人間はすべて、神様との関係をもつことができない、遠く離れた所にいるのです。

「すべての人は罪を犯したので、
神からの栄誉を受ける事ができず、。。。」
(ローマ人への手紙 3章 23節)

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。
神を求める人はいない。すべての人が迷いで、みな、
ともに無益な者となった。善を行う者はひとりもない。」
(ローマ人への手紙 3章 10-12節)

人間は本来なら神様を心から愛し、近く親しい関係にあるべき存在なのですが、今の世界は神様との関係が完全に断ち切られている状態です。罪とは聖い神様から離れている状態

から来るものであり、それは神様はいないと否定することも、または自分には関係ないと無関心になることも、さらには神様を認めても必要としないプライドも含まれます。それどころか自分には罪がないと思って生きています。それが「罪人」なのです。

罪への自覚とは

自分は罪人ではない、と思いたい私たちですが、それでも人間には心の奥底で自分の罪に対しての自覚があることに気が付きます。神様は人間をご自分に似せてお創りになり、人間の理性の中に神様の聖さが反映される「良心」というものをお与えになりました。人間はそれによって善悪の判断をすることができます。ですから、もし何か悪いことをするならば、その良心ゆえ、あの行いは間違いだったと自然に思えることもあります。また、聖書の教えも含め、法律やその他の決まり事によって、善悪の基準を知ることができます。自分が何か悪いことをした時、善に反することをしたと自覚できます。罪に対しての自覚があるということは、完全な義である神様が存在することを心のどこかで意識しているということです。

人類は古代から、「人間と自然はもともと清いものなのか、それとも邪悪なのか？」という問題に向き合ってきましたが、その問いに答えるのが難しいことがわかります。私たちは人々の内に善を見ることもありますが、人間と自然の両方に痛みと困難をもたらす悪の要素があることも体験から知っているからです。「2. 人間とは」で学んだように、その答えは両方にあるとわかります。人間も自然も聖なる目的をもって創造されましたが、墮落した状態によって入り込んだ悪はその目的を台無しにしました。そのため、私たちはその聖なる性質を回復する道を探す必要があります。

日本の宗教は人間の本性は清いという「性善説」に基づいている部分があるために、御祓い（おはらい）や水で洗う儀式によって外側を清める習慣があります。しかし、もしそれらの儀式で私たちが一時的に清くされたとしても、その後に再び戻る悪意や欲、自己中心の考え、嘘や妬みのような誰にも見られない、誰も知らない隠された罪をどうしたらよいのでしょうか。外側からは清く見えても、私たちの心の奥底までご存知の神様の前には、人間が考え出す「清め」は全く不十分なのです。

うそをついたり、自己中心的な考えをしたり、誰かをねたんだりしたことの無い人はいるでしょうか？また、罪とは悪い行いや考えだけのものではありません。良いこと、正しいこと、すべきことがわかっていながら、それらをしないことも罪です。例えば、助けることができるのに、他者の必要を無視することなどです。私たちは、他者から自分の罪を隠そうとし、隠れていれさえすれば、神様もそれを知ることもないと考えがちです。けれども、神様は全てを知っておられます。

罪の自覚は、自分がいかに罪に対して弱いものであるかを思い起こさせる苦いものです。しかし聖書の中に、これらの問題を解決する希望を見つけることができます。驚くべきことに、罪の問題への解決は、善人や聖人になるために努力をすることではありません。そ

うではなく、まずは自分の力で罪を取り除くことはできないという事実を受けれることに始まります。

次に続く「4. キリストの十字架とは」と「5. 救いとは」では、神様が持つておられる罪の解決について学びます。自分自身について探求するために、心をオープンにして学んでいきましょう。

この章の内容についてさらに学ばれたい方は、「**後部付録 3. 罪とは**」をご覧ください。



アニメーションはこちら

4. イエス・キリストの十字架とは

十字架の形はアクセサリーなどあらゆるところで目にするキリスト教のシンボルです。それは一般的に神様の愛と聖さを象徴する美しい物としてとらえられています。一人の男性が十字架にかかっているデザインを目にしますが、それはイエス・キリストと呼ばれる歴史上実際に存在した方です。十字架だけのもの、また、イエスがかかっている十字架の両方とも、クリスチャンの象徴として知られています。教会では十字架があることが自然ですが、なぜ十字架はクリスチャンにとって重要なのでしょうか。この起源はイエスが十字架にかけられた時代よりもはるか以前にさかのぼり、アダムとエバが犯した罪と、その罪の問題を解決する神様からのご計画から始まりました。

神様の約束

アダムとエバの墮落の結果である人類の罪の性質は、神様と私たちとの関係の壁となりました。聖なる性質を持つ神様は、たとえ神様ご自身が人間と関係を持つことを望んでいても、墮落した罪ある人間と一緒にいることはできません。それでも神様は、私たち人間への愛をあきらめませんでした。罪を犯したアダムとエバとの関係を断絶された直後、神様は「救い主」と呼ばれる方によって、神様と人間の間を修復されると約束されました。

救い主に関する預言

アダムとエバの子孫が世界中に増え広がる歴史の中で、神様は特別に選んだ人々を通して、神様と人間の間を修復するという約束を思い起こさせました。これらの人々は単に超自然的な推測をしたわけではなく、将来に現れる「救い主」に関するメッセージを神様から託された、「預言者」と呼ばれた人達でした。神様は救い主に関する情報を長年かけて預言者たちを通して教えて下さいました。その記録が聖書に集められており、そこには救い主に関しての預言が350以上記されてあります。

その代表的な預言として、以下のようなものがあります。

預言の内容	キリストが生まれる前	キリストにより成就された実際の出来事
救い主は、神の子である	ゼカリヤ 12:10 詩篇 2:7	マタイ 3:16-17 ヘブル 1:2-3
救い主は、処女によって生まれる	イザヤ 7:14	ルカ 1:26-31

預言の内容	キリストが生まれる前	キリストにより成就された実際の出来事
ベツレヘムの地で生まれる	ミカ 5:2	マタイ 2:4-6
救い主は、罪のゆるしのための供え物となる	イザヤ 52:15-53:5-12 詩篇 40:6-8 マラキ 3:3	ヘブル 9:12
救い主は、木にかけられて死なれる	申命記 21:22-23	第一ペテロ 2:24 ガラテヤ 3:13
救い主は、死からよみがえる	詩篇 16	使徒の働き 13:33-35

これらの預言が記録された時期は、救い主が誕生する数百年前から千年以上も前にのぼります。預言には救い主が誕生する場所、時代、家系、生き方、死に方などが記されていますが、その預言に当てはまるのは、全ての人類の歴史の中でただ一人、イエス・キリストというお方でした。

十字架の意味

では、このイエス・キリストは、なぜ十字架で死ななければいけなかったのでしょうか。その答えは「救い主は、罪のゆるしのための供え物となる」という預言の中にあります。

人類は墮落から今に至るまで、自分の罪を拭う方法として供え物や清めの洗い、善意的行為、修行、ざんげや念仏など多くのことを試してきました。しかし罪の性質を持って生まれてきた人間が、その性質を自力で取り除くことはできません。ましてや創造された時の神様との信頼関係を自分の力で回復することなど不可能です。何を捧げても、例え最善の行いが人間の目に認められても、それらは完全に聖い神様の前では罪のつぐないとして全く不十分なのです。

墮落の状態にいる私たちに最も必要なものは、神様の目に受け入れられる完全な供え物を捧げてくださるお方です。それは、私たちのように罪の性質がある者ではなく、完璧に聖い人間ではなければなりません。神様はそのようなことができる人間はこの世に誰一人いないとわかっておられました。それゆえ、神様はご自分の愛する子をこの世へ送ってくださいました。その方がイエス・キリストです。イエスは人間として生まれ、完全に聖い生き方をされ、全人類の罪のゆるしのために、私たちの代わりに聖なる捧げ物としてご自分のいのちを差し出したのです。

「この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のためのなだめのささげ物です。」
(第一ヨハネの手紙 2章 2節)

イエス・キリストの十字架の死によって、罪と恥の問題はなくなりました。神様と人類を引き離していた罪の問題は、神ご自身によって解決されました。ここに、神様がどれほど私たちを愛しており、私たちとの親密な関係を望んでおられるかを知ることができます。なぜなら、私たちが神様と元通りの信頼関係を結ぶために、神様ご自身のひとり子さえも惜しまず、十字架の死に渡されたからです。そのように私たちに対する愛を十字架において示されたのです。

「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子と共にすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」
(ローマ人への手紙 8章 32 節)

罪の性質をもっている私たちを救うために、罪のないイエスはいのちを捨ててくださいました。しかし、私たちはこのような重い犠牲を伴う救いを受け入れることを躊躇します。なぜイエス・キリストはあのような残酷な十字架の刑で死ななければならなかったのでしょうか。他に方法はなかったのでしょうか。

このことを理解するために、日本の習慣を例にとってみましょう。日本人は食事の前に、その食物に対して「いただきます」と言います。食料はあらゆる植物や動物の命を絶つことから成り、それらの命によって私たちが飢え死にすることから救われるのです。食物の命を受けとるからこそ、私たちが生きることができるので「いただきます（上の位置からのものを頂戴する、受け取るという意味）」と言います。この日本の慣習と聖書が語っている犠牲の必要性との間には共通点があります。それは、もしイエスが死ななければ、私たちには新しい命がないという聖書の教えです。食物になる命が絶たれるのは悲しいことですが、私たちに生きる力を与えてくれる美味しいごはんを楽しむように、イエスが十字架でしなれたことは悲しいですが、そのことによって神様と私たちの間にあった隔たりは取り除かれ、神様との死んでいた関係が戻り、本当の意味で生きる喜びを味わうことができるのです。

「アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストにあってすべての人が生かされるのです。」
(第一コリント人への手紙 15章 22 節)

処刑の道具であった十字架は、美しさを表すものとなりました。かつては罪の結果である「死」を表すものでしたが、今ではイエス・キリストが成し遂げられた業の結果、「いのち」を意味するものとなったのです。この「いのち」とは、アダムとエバがこの世にもたらした神様との関係における「死」からの回復です。

では、どのようにして私たちはそのような「いのち」を頂くことができるのでしょうか。次回の「5. 救いとは」でそのことを学んでいきます。

この章の内容についてさらに学ばれたい方は、「**後部付録 4. イエス・キリストの十字架とは**」をご覧ください。

救



アニメーションはこちら

5. 救いとは

創造主の目的

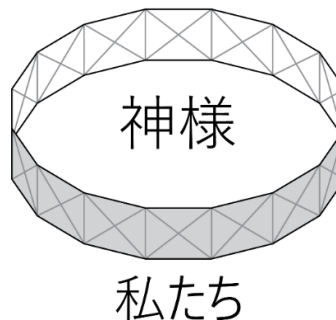
私たちはは幸運を得るために寺や神社で願い事をしたり、山や岩や木などの神霊に頼ったり、占いを信じたりします。神々のために寺や神社を建て、あたかも神々が人間の利得のために造られたかのように、ご利益を期待して超自然的な力を求めます。しかし、造り主とは、造られたものよりも先に存在しているものです。神様についても同じことが言えます。

神様は世の全てのものができる前から存在されていた方で、お寺や神社、人の手で作られた物の中には住んでいません。神様というお方が、私たち一人ひとりに目的を持って創造されたからです。

靴屋は、履き心地が良くておしゃれな靴を作ります。芸術家は、美しさを表現するために芸術作品を作ります。ランプを作る人は、その作品で暗い部屋に光をもたらします。同じように神様は私たちを、具体的な目的にそった、素晴らしいデザインに創造してくださいました。ですから私たちの存在は特別なのです。そして、その目的を知る為には私たちの作り手である神様のもとに帰る必要があります。

神様から離れ、壊れて失われた存在

「救い」の意味を理解するためには、まず「何から救われる必要があるのか」を理解する必要があります。人間が犯した罪の結果は、創造主である神様から私たちが遠く離れた失われた状態になってしまったことです。私たち人間の本質は、かつての「非常に良い」姿が壊れた状態であり、個々に与えられた特別なデザインと目的も理解できなくなっています。どんな人間の最善の努力さえもその欠陥を補うことはできません。自分では変えることのできない、この壊れて失われた状態から私たちが救われる必要があるのです。



「私たちは皆、羊のように迷っています。」

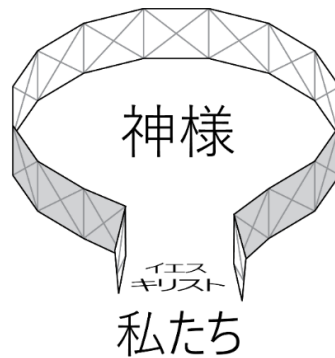
(イザヤ53章6節)

神様は限りなく聖なるお方であるため、そのご性質に反することは一切されません。神様は、私たちの心の内もご覧になることができますが、私たちの心は罪に満ちています。神様は、汚れた者、正しくない者、不完全な者と一緒にいることはできません。また、罪人である私たちが自分で清くなることも出来ません。そのため、この図のように、私たちは神様から離れている状態なのです。神様が枠の中だとしたら私たちは外にいて、神様の元に行く方法がありません。

神様と再会への道

しかし神様の私たちに対する愛は、想像をはるかに超えたものでした。神様は遠くに離れている私たちを近くに寄せるために、ご自分の愛するひとり子イエス・キリストを手放し、十字架の死という完全な罪のつぐないの捧げ物とされました。私たち罪人が受けるべきであった罰は、もうイエスが受けて下さったので、神様は私たちを「罪人」とみなすことはせず、聖い神様の近くに行けるようにしてくださいました。

このように、私たちが神様のもとに行くための道を神様ご自身が用意してくださいました。それはドアを開けて入って行くようなものです。聖書では、イエス・キリストがご自分を「門」、また「道」である言われた理由でもあるのです。



「わたしは門です。だれでも、
わたしを通過して入るなら救われます。」

(ヨハネによる福音書10章9節)

「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたし
を通してでなければ、

だれも父のみもとに行くことはできません。』」

(ヨハネによる福音書14章6節)

私たちの身代わりとなってくださったイエス・キリストの十字架の業は、父なる神様の前で私たちを永遠に正しいものとして受け入れてくださることができると学びました。この

身代わりは、私たちが受け取るか拒むか選ぶことのできる、神様からの無償の贈り物です。「恵み」であるこの贈り物は、あなたの目の前にあり、今受け取ることができるのです。これは、私たちが受ける資格がないにもかかわらず、神様の愛によって私たちに注がれた一方的な神様の恵み、すなわち恩恵なのです。

神様は親切で忍耐強く、人生における様々な状況や経験、そして神様のもとに戻る道のみを見い出させてくれる人々を通して、私たち一人一人を近くに呼んでくださり、この素晴らし救いの「贈り物」を差し出してくださいませ。

救いを受け取る

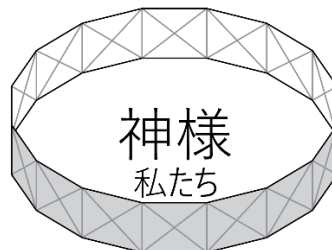
この神様の贈り物を受け取ることを、イエス・キリストを「信じる」、もしくは「信頼する」とも言います。私たちは自分自身が罪人であり、自力で罪のない者になることはできない現実を受け入れなければいけません。自分の努力で良い人間になろうとすることをやめて、私たちが救われるためには、イエス・キリストの身代わりが必要であることを、神様の前に認めなければなりません。

もし私たちが神様からの贈り物である救いを受け取るなら、それはまた、神様と会うことでもあります。もはや罪のために神様から切り離された状態にいる必要はないのです。それどころか、神様に出会うときに、自分が造られた目的を神様から学ぶことができるのです。これが救いです。

あなたを永遠に変える大切な一歩

イエス・キリストはあなたの救い主です。イエスはあなたを愛しておられるので、あなたを円の外に放っておかれませぬ。イエスはあなたを神様のもとへと招き入れるために、あなたが通る道になってくださったのです。あなたが今できることは、その道を通るために一歩踏み出すことです。

救いの道を踏み出して神様と出会うのならば、あなたには希望と喜びに満ちた人生が待っています。それは、神様ご自身がこれから永遠までも、あなたと共にいてくださる人生です。神様はあなたがこの世に生を受けて生まれる前から、あなたが気がつかないでいた間も、神様に帰る道をイエスにおいて用意して下さっていたのです。それは、神様がおられる場の外にいた人が、家に戻って来た迷った子供のように歓迎されるようなことです。



「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。
そうすれば見つかります。たたきなさい。
そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、
捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」
(マタイによる福音書7章7-8節)

神様を知り、神様との関係を持つことは、すべての人間が創造された目的です。そのような関係があるなら、あなたはより豊かに人生を理解し、困難な時でさえ喜びを経験し、他者を大切にし、喜んで人々に仕えることができるようになります。

「神は言われます。
「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵
みの時、今は救いの日です。」
(第2コリント6：2)

神様の救いに対する応答

1. あなたは世界を創造し、あなた自身もお造りになった神様の存在を信じますか？
2. あなたは罪人であるため、聖い神様から離れた存在であることを認めますか？
3. あなたは神様に愛されており、イエスの十字架の死は、あなたを罪から救うためのものであることを信じますか？
4. あなたは、この救いを神様からの贈り物として受け取り、神様との信頼関係を持ちたいと思いますか？

上記の問いに「はい」と応答したいと願われるなら、以下の祈りを持って、この学びを閉じましょう。

「私の創造主なる神様、私があなただけのことを知らずに生きてきた人生をここまで導いてくださりありがとうございます。あなたが送ってくださったイエス・キリストが私の罪のために、十字架で死んでくださったことに感謝します。

あなたは私を愛しており、あなたのもとに私を招いてくださっていると信じ、あなたの救いを受け入れます。

これからずっと私と共にいて、私を導いてください。」

もしこの祈りをするように導かれたなら、あなたは今、神様と出会ったのです。あなたは、あなたを愛してやまない神様の近くに引き寄せられました。けれども、神様にとっては新しい出会いではなく、「再会」だったのです。神様の愛によって造られたあなたは、生まれる前からこれまでの歩みも全て神様に知られていたのです。造られた者が、造った

方の元へ戻る時、本来意図された生き方をすることができます。今、あなたとの再会を待っていた神様との新しい人生がはじまろうとしているのです。

この章の内容についてさらに学ばれたい方は、「**後部付録 5. 救いとは?**」をご覧ください。

後部付録 1. 神とは

聖書は、私たちは「神様について」知るばかりではなく、「神様を自分に親しいお方として知ること」ができると語っています。神様というお方を、知識だけではなく、個人的な関係を持って知っていくことができるのです。聖書では様々な表現で、神様と私たちの関係を表しています。例えば「父なる神」「私たちは神の子供」「神の家族」「友」「陶器師と陶器」「羊飼いと羊」、などです。この世を造られた創造主なる神様と、このような親しい関係を私たちが持つことができるというのは本当に驚くべきことです。

創造主なる神と八百万の神

聖書の神は、ご自身が唯一の真の神だと語っています。普段「神」という言葉は、この世の限界を超えた力を持つ、体や形を持たない存在を意味します。また、この世がうまく機能するために必要な特性や力を願い、人が期待している存在を作り出したりもします。それゆえ、日本では八百万の神々が存在すると言われるのです。これは、私たちの目で見える以上のものが存在することに対して意識があるゆえでしょう。けれども、そのような霊について示される神々は、聖書が語る神とは全く別物です。聖書が語る、創造主の神は、ご自分のなさることに限界がなく、永遠に存在し、物質的なものも霊的なものも全ての源であるお方です。

創造主なる神について書かれている聖書の箇所

- 「はじめに、神が天と地を創造された。」
(創世記 1 章 1 節)
- 「すべての生き物といのちと、すべての肉なる人の息とは、その御手のうちにある。」
(ヨブ記 1 2 章 1 0 節)
- 「あなたこそ、私の内臓を造り、母の胎の内で私を組み立てられた方です。」
(詩篇 1 3 9 編 1 3 節)
- 「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住みにはなりません。」
(使徒の働き 1 7 章 2 4 節)

神のご性質

- 人間、この地、また全宇宙を創造された。
(創世記 1 章 1 節, ヨハネ 1 章 3 節)
- 罪がなく完全に聖い。不純や悪の中にいることができない。
(レビ記 19 章 2 節, 詩篇 99 編 9 節, 詩篇 5 編 4 節)
- 完全。全能。何でもできる。
(詩篇 18 編 30-32 節, ルカ 1 章 37 節)
- 全知。過去も未来もこの世のすべてをご存知。一人一人の人生の歩みもご存知。
(ヘブル 4 章 13 節, 詩篇 33 編 13-15 節)

- 時がない。常に存在しておられ、初めも終わりもない。
(イザヤ 46 章 9,10 節, 黙示録 22 章 13 節)
- 遍在。一つの空間に縛られず、同時に臨在できる。
(エレミヤ 23 章 24 節)
- 不変。変わらず、常に同じ。
(ヘブル 1 章 10-12 節, 13 章 8 節, マラキ 3 章 6 節)

その他にも神様に関する聖書の箇所

- 良い父
(ヤコブ 1 章 17,18 節, 第一ヨハネ 3 章 1-3 節)
- 良い友
(ヨハネ 15 章 13,15 節)
- 信頼できるカウンセラー、ガイド
(詩篇 119 編 105 節, 箴言 3 章 6 節, イザヤ 42 章 16 節)
- 知恵の源
(ダニエル 2 章 20-22 節, 箴言 5 章 21 節, イザヤ 40 章 28 節)
- 守り主、助け
(第二サムエル 22 章 3 節, 詩篇 46 編 1-3 節, 34 編 4 節)
- 愛
(第一ヨハネ 4 章 8,16 節; ヨハネ 3 章 16 節)
- 希望
(ローマ 15 章 13 節, イザヤ 40 章 30, 31 節, ミカ 7 章 7 節)
- 「ゆるし」を与える
(ミカ 7 章 18 節, 詩篇 30 編 3-4 節, 第一ヨハネ 1 章 9 節)
- みこころによってご計画を実現される
(エペソ 1 章 1 1 節)
- 私たちが他者の祝福となるように、まず私たちを祝福して下さる
(創世記 12, エペソ 1 章 3 節, ローマ 8 章 32 節, マタイ 7 章 9-11 節)

後部付録 2. 人間とは

人間の役割

「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」
(創世記 1 章 26-27 節)

私たちは偶然に存在し、意味も目的も絶対的価値もない存在ではありません。私たちは一人一人、神の目的によって意図的に設計された、驚くべき創造物です。神様はこの世にある全てのものを、最もかけがえのない人間のための舞台として創造されました。人間は「創造の冠」としばしば言われます。なぜなら創造の目的の全てが、人間によって、また人間を通して知らされるからです。この聖書の箇所に見られるように、神はこの世界を創造した後、人間に「管理人」という重要な役割を与えました。

人間は、神のかたちに造られた、比類なき存在です。人間は、自然、動物、さらには天使など、他の創造物とは本質的に異なります。私たち人間だけが、創造主に倣った自由意志、思考、責任、愛情に基づいた関係などという特徴を持っています。それは人間が、この世において神様の姿を映し出すことができるために備えられたものです。これも人間に与えられた役割です。私たちが鏡として主の栄光をこの世に映し出すことによって、神の素晴らしさを反映することができるのです。人類の究極の目的は、神の栄光をお返しし、永遠に神を喜ぶことです。

人間の墮落による恥

初めの人間アダムとエバが墮落した（完全に聖い創造主から切り離された）ことにより、その後の子孫である人類全体にこの「人間の墮落の状態」が受け継がれてしまいました。これは丁度、一家の主が不祥事を行った場合、その一族全員が恥辱を受け継ぐことになるのと似ています。

神様の忠告に背いた行動の結果、アダムとエバは神様との愛に基づいた完璧な信頼関係を失いました。神様の前では隠すことは一つもなく、全てを知られても恥ずかしくなかった関係が、神様に知られたくない、自分の行動を問われたくない、隠れたい、というものになってしまったのです。このような神様に対する恐れを、日本語では「恥」と呼ぶこともできるでしょう。

私たちは神様を知らない時でさえも、自分の中に何か足りない、または隠したい、恥ずかしい部分があることを感じる場合があります。その「恥」とは、神様の前で全部を安心してさらけ出すことができる人間の本当の姿が、墮落によって崩れてしまった傷跡とも言えるでしょう。

後部付録 3. 罪とは

「罪」と「犯罪」

「罪」と聞くと、たいていの場合は刑法上に関わる悪い行いを思い浮かべます。けれども、「罪」の概念を理解するには、その意味を考える必要があります。「犯罪」というのは、泥棒、詐欺、殺人、など法律に関わる罪の「行い」を示すもので、「罪」の一部です。聖書でいう「罪」とは、犯罪のような行いに関することだけではありません。「罪」について考えるとき、悪い行いだけを指すなら、それは不十分な定義なのです。

聖書でいわれる「罪」とは、人間の「性質」を指すものです。それは、創造主との関係が壊れている状態を指します。この世を造られ、完全な秩序を持たれている神様との関係がないのなら、神様がもともと意図されていた完全な正しさや聖さから外れた状態にいます。そのような状態を「罪の中にいる」と表現することもできます。下記で触れますが、「罪」という言葉の語源には、「的はずれ」という意味があります。創造主なる神様から離れ、また神様の絶対的な正しさの基準—的—から外れている状態を「罪」と呼びます。悪い行いももちろん罪の中に含まれますが、人間には罪という性質があるため、罪深い行動をして当然なのです。その人間の罪深い性質のため、神様の意図された良いものの代わりに、世界はありとあらゆる罪であふれています。

罪 – 的外れ

日本人は、「人間は全て罪人である」という聖書の教えに不快感を抱くことがあります。それは、大半の人が法律に反した悪いことをしていないのに全員を犯罪者呼ばわりするのはおかしいと思うからです。ところが、そう思う人達でも、完璧な人間は存在せず誰もが間違いを犯すということは認めます。ただその「間違い」というのが「罪」であるとは納得できないのです。

聖書で使われている「罪」という言葉の意味をよりよく理解するために、聖書の原語の一つであるヘブル語を見てみましょう。

「罪」はヘブル語では「チャタ」という言葉が使われており、「的はずれ」という意味があります。弓矢が的を外れた部分に当たるように、私たち人間も神の基準からはずれた状態にいるということです。弓矢が髪の毛一本分でも的から外れているなら、それは「チャタ」という状態なのです。ちいさな間違いも、おおきな犯罪も全て「チャタ」なので、たとえ人間社会の基準では善人に見られても、アダムとエバの子孫である限り、神様の完全な正しい状態である「的」から外れている罪人なのです。

後部付録 4. イエスの十字架とは

イエスの十字架のことを深く聖書で学ぶとき、それは神様のひとり子が人間の罪の為に身代わりで死んで下さるといふ、世界のどの宗教にも見られない出来事であることがわかります。イエスの十字架は、聖い神様の罪に対する正しい怒りと、私たち人間に対する深い愛が衝突した場所であると言われていています。十字架が神様の私たちに対する愛の現れであるとするのなら、その愛とはどのようなものであるかを知る必要があります。

愛の意味

聖書を見ると、「愛」はギリシャ語でフィリアとアガペーが用いられていますが、ギリシャ文化では4つの言葉があります。

1. エロス (*Eros*) - ロマン스의愛、夫婦間の愛
2. ストルゲ (*Storge*) - 家族間の愛
3. フィリア (*Philia*) - 友人間の愛
4. アガペー (*Agape*) - 無条件の愛、神の私たちへの愛

日本では何かを頂くと、お礼をお返しすることが礼儀とされます。ですから、お礼が戻ることを期待しながら何かを提供したり、逆にお礼を負担させないように提供を差し控えたりする場合があります。このように、お互いの見返りを気にするため、与えられた価値のほんの一部も返すことができないような偉大なものを受け取ることを躊躇してしまうのです。

十字架上でイエスが示してくださった偉大な愛は、アガペーの愛です。これは無条件の愛で、見返りを全く期待せずに与えられるものです。神様は何の見返りも必要とせずに私たちが愛してくださるのです。なぜならば『神は愛』（ヨハネ第一 4:16）だからです。そのような素晴らしい神様の愛を知るときに、私たちはそれを躊躇せずに受け取ることが大切です。神様は私たちからのお返しを全く要求していません。心が罪に満ちて神様から離れていた時にも私たちが愛し続け、私たちが負いきれない罰をイエスが代わりに受けてくださった程の偉大な愛は無償で与えられます。私たちはそれに対して「お返し」はできませんが、この素晴らしい愛を感謝して受け取ることはできます。

預言/預言者

聖書でいう「よげん」とは、【預言】と書きます。預言とは「預(あず)かった言葉」という意味で、神様独自の言葉を託されることです。ですから、聖書の中で「預言者」と呼ばれる人たちは、神様からの直接のメッセージを人々に伝える人たちのことを指します。一般の予言とは、「予め言うておく」ことを意味し、占いなども含め、前もって未来に起こる出来事を予告し言い当てることであり、聖書の神様の意図的な【預言】とは異なります。

イエスについての預言

聖書の主人公はイエスと呼ばれるキリスト（救い主という意味）です。イエスの出現は旧約聖書（聖書の前半39巻）において、イエスが生まれる千年以上も前から繰り返し預言されていました。その預言が実際にイエスの生涯において成就したことにより、イエスこそが神様がご計画された救い主であると、現代の私たちが理解できるようになりました。旧約聖書はイエスが生まれる前の約1500年間にわたって書かれましたが、その中に含まれる預言は、長い歴史のなかでイエスが将来もたらす救いの希望を年月をかけて明らかにしていきました。

旧約聖書には350を超えるイエス・キリストに関する預言があります。その中にはイエスの誕生の時期と場所、彼の生まれ様、生き様、活動の内容、死に様とその意味、死からのよみがえりなどが含まれています。1947年に最初に発見された死海文書（死海近辺で発掘された古代に存在していた聖書の一部）は、現在の旧約聖書と一致していることがわかり、聖書は後の時代に書き足された書物では無かったことが判明しました。これらの史的価値のある古文書は、イエスの誕生の数世紀前に隠された後、20世紀まで現れませんでした。そういう意味でも発見された死海文書は、旧約聖書の正確さとイエス・キリストの正体を証明するタイムカプセルとも言えるでしょう。

イエス・キリストによって成就された「救い主」についての重要な預言とその成就した内容をさらに詳しく学ぶ際には下記を参考にしてください。

預言の内容	旧約聖書	預言の内容
救い主がイスラエル民族の父であるアブラハムの子孫として来る	創世記 22:18	ローマ 9:5
救い主はユダヤ人部族の「ユダ族」からでる	創世記 49:10	ヘブル 7:14
救い主はダビデの血統から生まれ王となる	イザヤ 9:7	ルカ 1:32
救い主はダビデの町ベツレヘムで誕生する。（「ベツレヘム」は「パンの家」という意味でイエスは自分のことを「いのちのパン」と呼ばれている。ヨハネ 6:35）	ミカ 5:2	ルカ 2:4-6
救い主は処女から誕生する	イザヤ 7:14	ルカ 1:26-31
救い主はユダヤ人として生まれるが、全ての民の救い主となる	創世記 28:14 イザヤ 11:10	マタイ 12:15-21

預言の内容	旧約聖書	預言の内容
救い主は暗闇に光りを照らし、失われた人々へ神の救いの計画を明らかにする	イザヤ 9:1-2	マタイ 4:13-16
救い主は奇跡を通して生と死に対する力を表す	イザヤ 35:5-6、 53:5	マタイ 11:2-6
救い主は無実であるにもかかわらず罪人として罰せられ、抵抗することなく黙って死の刑罰を受ける	イザヤ 53:7	マルコ 15:4-5
救い主は自分の命をささげる	イザヤ 53:11-12	マルコ 15:27-28
救い主の死は、私たちの罪のあがないのために犠牲とされた神の愛	イザヤ 53: 5-6	ローマ 5:6-8

イエスの復活

「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示す通りに三日目によみがえられたこと、」（第一コリント 15章：3～4節）

預言の中には救い主のよみがえり（復活）も含まれており、これもイエス・キリストによって成就しました。イエスは十字架の上で私たちの罪の供え物となり、神様の罪に対する怒りをなだめてくださいました。「罪の報酬は死である」という聖書にある神様の言葉は、生まれながら罪の性質をもっている人間すべてが死ななければならないことを示しています。しかし、罪なきイエスは私たちの罪を負い、その刑罰を受けて死んで下さいました。それにより、神様の罪に対する怒りはおさまり、残るは神様の私たちに対する愛のみでした。神様はイエスを墓の中に閉じ込めておかず、3日後に死の力を打ち破ってよみがえらせることで、アダムとエバの罪のゆえに入ってきた死を無効とし、この世の人生と永遠まで神様と共に過ごすための新しい命を私たちの為に用意して下さったのです。

後部付録 5. 救いとは

救いとは「神との平和」と「神にある平安」につながる

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」
(ヨハネ 14:7)

私たちが救われた時に体験できる平安には2種類あります。

まず、神様と私たちの関係における「神との平和」です。神様から離れて罪の虜になっているとき、罪を憎む神様と私たちは敵対関係にありました。しかし、イエスの犠牲が、神様の罪に対する怒りをなだめたことで、私たちと神様の間に平和が戻ったのです。つまり罪の問題が取り除かれたことによって、神様との敵対関係が、人間が最初に創造された時にあった「神との平和」に回復したということです。

次の「神にある平安」は、神様がイエスを犠牲にするほどに私たちを愛して下さったという事実を知ることから来る平安です。今まで知らなかった愛なる神様と出会ったことにより、その愛によって私たちの心から恐れや不安が取り除かれました。それは全知全能の神様がどんな苦しい時でも私たちを一人にはせず、共にいてくださり導いてくださることを知るからです。神様の愛から来る平安は、私たちだけでなく周りの人までにも影響を及ぼすものです。

救いとは「永遠のいのち」が与えられること

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、
ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」
(ヨハネによる福音書 3章 16節)

永遠のいのちとは神、神様と終わりなく共に生きることができるという意味です。アダムとイブは、初めは神様と共に永遠に生きるいのちが与えられていました。しかし彼らの罪の結果、人間は肉体の死のあとには滅び（地獄）に至る存在になりました。しかし、イエスが私たちの罪の罰を負って下さったことにより、滅びではなく、神様と共に生きる場所（天国）で永遠に過ごすいのちが、イエスを信じたときに与えられるのです。

また永遠のいのちとは、救われたことによってエデンの園で完璧であった神様との正しい関係が戻り、今の世でも神様によって満たされ、そして喜びに溢れた人生を神様と共に生きることです。永遠のいのちとは救われた時からの人生が一変するものであるとも言えます。

救いとは赦されること

日本語では「ゆるす」という漢字は「許す」と「赦す」があります。「許す」の意味は「許可、認める」ですが、「赦す」は「過失や失敗などをとがめない」という意味です。神様は聖いお方ですから、どんなささいな罪も許可しません。しかし、その神様がイエスに免じて私たちの罪をとがめずに、赦してくださると言うのです。

この赦しとは、つぐないや善行、また自分の地位や名誉、道徳的なステータスに影響されるものではありません。神様の赦しは、十字架によるイエスの献身のみに基づいています。イエスはすでに私たちの罪の罰を受けてくださったので、正義で聖なる神様は、イエスを罰することで私たちの罪をとがめないで赦してくださるのです。

*「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」
(ローマ人への手紙5章8節)*

この聖句に見られるように、神は私たちがゆるすための第一歩を踏み出してくださいました。神は私たちが悔い改めて善を行い、ゆるしを請うようになるまで、待つことはしませんでした。私たちが神の元に帰ろうと考える前に、ゆるしを可能にするための道を用意されたということは、神がいかに私たちがゆるすことについて熱心で真剣であるかを示しています。この学習のいくつかのところで学んだように、私たちの墮落した性質と罪は私たちが神から引き離します。「罪の報酬（結果）は、肉体的にも霊的にも死」（ローマ3:23）ですが、神はだれ一人として死ぬことを望んでいません。

*「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。
かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」
(第二ペテロの手紙3章9節)*

神様は、すべての人々がご自身との再会されることを願われています。ただ私たちの罪を見逃すのではなく、私たちに代わって罪の罰を受けてくださったという神様のゆるしに気づくとき、私たちは主イエスがなされたことがどれほど素晴らしいことなのかを理解することができます。

救いは神様の恵み

「恵み」と翻訳された古代ギリシャ言語は「カリス」という言葉ですが、それには二つの意味があります。まず恵みとは、「親切さ（寛大）」を意味します。これは受ける価値に関係なく与えられる好意と捉えることができます。神様は私たちが救うために神様のひとり子（イエス）をこの世に送り、イエスが私たちのために死んでくださったことによ

て、神様の愛を示されました。私たちはこの恩恵を得るために何もできません。それは受け取る価値がない者に与えられる神様の一方的なご好意だからです。

第二に、「恵み」とはシンプルに「贈り物」ということができます。神様は私たちに対する好意によって恵みを示してくださいましたが、それはまた御子イエス・キリストという贈り物を私たちに与えてくださったという意味です。神様からの贈り物は無条件です。つまり、私たちの地位や能力には全く関係ありません。イエス・キリストは神様から全世界への贈り物です。

神様の「恵み」は感謝をもたらします。イエス・キリストという贈り物の素晴らしさを本当に理解するならば、私たちに残された選択肢は感謝の気持ちを持って受け入れることだけなのです。私たちが救われるのは、この恵みのおかげです。

救いとは新しく造られた者となること

「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。

古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

(第二コリント人への手紙5章17節)

イエスを信じると、私たちの古い罪の性質が取り除かれ、新しい性質が与えられます。古い性質とは、アダムとエバから始まったもので、神様よりも自分を喜ばせる自己中心的な欲望によってコントロールされ、自分の上に立つ権威（神様）を嫌う性質です。古い性質自体は「的外れ」ですから、神様に従うことができません。しかし新しくされた者はイエス・キリストによって神様との関係を持っているので、神様を敬い、神様との歩む中に真の喜びを見つけだすことが出来るのです。神様は私たちに、人生の新たな目的と共に新しい性質を与えてくださいます。そして新しく造られた人は本来意図された姿で神様や他の人々に仕えることができるのです。

救いとは神様と「再会」すること

人間は神様と共に生きる存在として造られたにも関わらず、神様の存在さえも知らずに生きています。私たちが神様を知らない状態なので、まず神様ご自身がイエス・キリストを通して、私たちの前に救いを提供して下さり、神様との再会を可能にしてくださいました。それは神様の私たちに対する計り知れない大きな愛に基づいています。

聖書が語る神様の存在、人間としての存在の意味、イエスの十字架とよみがえり、罪の赦し、神様がイエスを通して与えて下さる永遠のいのちは全て救いの恵みです。その恵みはどこから来るのでしょうか。それは私たちが神様のもとに戻ったときに与えられるものです。私たちが神様を見つけたのではなく、神様側からのご計画により、世の始まりから私たちを個人的に知っておられた神様との再会により、私たちは救われるのです。

あとがき

この「ファーストレベル」の道のりを通して、あなたも創造主である神様と再会できたでしょうか。あなたとの関係を取り戻したいという神様の計り知れない大きな愛に応答できたことを願います。愛のうちに目的を持ってあなたを創造された神様と親しい関係を持ち、神様の目的に沿って生きる時、あなたは自分の本当の姿に戻ることができます。劇的な変化が生活の中にすぐに起こるわけではないかもしれませんが、けれども神様と共に生きる新しい人生とは、神様の愛に基づいた人生の目的をはっきりと見極めることができるものなのです。

あなたが神様との再会へと導かれたなら、次の「セカンドレベル」への旅が始まりました。この本の発行元であるセカンドレベル・ミニストリーでは、これからの新しい人生をどのように神様と豊かに歩んでいけるかということに焦点を当て、あなたのクリスチャンとしての歩みをサポートします。これからも続けて、神様について、また聖書が教える真実について学んでいきましょう。

セカンドレベル・ミニストリー

www.secondlevel.org